

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年9月20日（水）14：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

あわせてまして、本日は委員長田中の最後の会見となります。まず最初に、委員長田中から一言申し上げます。

○田中委員長 挨拶だから、本来は立ってやるべきなのかもしれませんが、ちょっと座って御挨拶させていただきます。

今日も大勢の方がお見えになっておりまして、ちょうど私が就任したときもこんな雰囲気だったような気がします。数えますと、先ほど広報からお聞きしたのですが、240回目になるのだそうです。

この間、5年間、相手も変わりましたが、いろいろな経験をさせていただきました。個人的に言えば、この年になって毎週こういう会見で緊張感をもらうということが、何とか5年を支える、ある意味では精神力を培ういい緊張感を頂いたと思って、改めて、いろいろな御意見がありましたけれども、それはそれとして感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

規制委員会、規制庁が発足したときに、一番みんなで議論をして心がけたことは、いくつかありますけれども、独立性と、それから、透明性を保とうということだったわけです。要するに、最近でもいろいろ話題になりますけれども、一般にやはり見えないところで何か決まるということについて、非常に今の社会はいろいろな問題を起こしますので、私どもが発足したときは、結局、原子力安全規制に対する信頼というのが全く地に落ちた状態にありましたから、これがどういうふうになるかということについて、結果を見ないで、とにかく私どもが懸命に努力している姿を率直に全部見てもらおうということで、そういう姿勢で取り組んできました。

この週に1回の委員長の記者会見というのも、結局、ほかの省庁ではなかなかないような試みかと思います。もちろん政府官房は、菅官房長官なんかは1日2回記者会見をして、大変御苦勞されているなど。その意見はさることながら、実は内心、同情心もあるというか、そんな感じを持って、シンパシーを持っていつも拝見していますけれども、そういうこともありました。

いずれにしろ、皆さんがこういう形でいろいろな意味で関心を持っていただいたことが、今の規制委員会、規制庁の姿を作ってきたと思います。これをどういうふうに評価

されるかは、いろいろな評価があると思いますが、私自身としては、発足時の先行き全く見えないときから見たら、一つの形ができてきたというふうに判断しています。これも皆さんのいろいろな意味での協力があったからだと思います。

メンバーがかわって新しいメンバーになると、いろいろな御意見が出てきたり、同じ質問も何度も受けましたけれども、そういうものにも私自身も結構耐えられるようになってきたと。時々切れたりして、皆さんからお叱りを受けることもありましたけれども、それはそれとして、無事5年間務めさせていただきましたことに改めて感謝を申し上げて、一応、今日で終わりということですので、御挨拶にかえさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

○司会 それでは、皆様からの質問をお受けします。本日も多数の方がおいででございますので、質問については、基本1往復でお願いしたいと思います。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。ミウラさん。

○記者 読売新聞のミウラです。どうもお疲れさまでした。

最後の最後に、特に思い入れが深いと思われる東京電力の柏崎刈羽原発の審査が今日も議題になっていましたが、この審査の終盤では、かなり手探りの状態というのでしょうか、事業者としての適格性、事故を起こした事業者が再び原発を動かす資格があるのかという見きわめについては、法的な実効性を持たせる担保をどうするかとか、こういったところは手探りの状態だったと思うのですが、それについて振り返っての総括と、あと、事業者の適格性を見きわめる上で、あらかじめルールなりを決めておくべきだったのではないかと私は思うのですが、それについてはどのようにお考えでしょうか。

○田中委員長 東京電力の事業者としての適格性を見きわめる、どういうふうに確認していくかということについては、もちろん手探りですね。初めてだし、今後ともそういうことがたびたびあるかどうかというレベルでの確認作業ですから、そのとおりだと思います。

いずれ、そういう何らかの形できちんとしなければいけないと。国民、一般的な目から見たら、私どもがやっているのは少し行き過ぎているという評価もあるかもしれませんが、我々の置かれている状況、ミッションからいうと、きちんとそこところは、安全が担保できるようなことが確認できたら、それを認めないという判断はあり得ないだろうということで、そういう方向で、できるだけ我々としてはできることをやってきたと。

本当は前々からずっとそういうタイミングは考えていたのですが、最後になって一番遅れてぎりぎりになってしまって、まだ決まっていませんけれどもね、最終的には。東京電力の経営陣が変わるという話がもう4月ぐらいから出ていまして、かわる経営陣にいろいろ約束をさせても駄目だろうということの判断があって、結局、7月に入ってからスタートになったから、そこで3ヶ月ぐらい遅れているということがあります。

それから、あらかじめルールを決めておけというお話ですけれども、結局、適格性を掘り下げていくと、安全文化というか、そういう一つの非常に量的にとりか、評価しにくい指標になるわけですね。それを全体としてどういうふうな形で評価するかというのは、やはり委員会の責任においてその判断をするということと、そういう評価結果に対して、事業者がどれだけそれにきちんと対応してもらえるかと。そのための担保をとるということで大体今回は進めてきたということで、おそらく何か書くとしても、そういう非常に大ざっぱな考え方を整理するぐらいで、それ以上のことはなかなか難しかったのではないかという、今後もそんな簡単にできることではないと思っていますけれどもね。

○司会 それでは、スミさん。

○記者 共同通信のスミです。

5年間、本当にお疲れさまでした。

ミウラさんの質問にもあったのですけれども、今日、委員長は最後の定例会合だったと思うのですけれども、その中で、柏崎刈羽原発の再稼働審査について、大筋で道筋をつけられたということについて、安堵とか満足感なのか、あるいはやり残した部分があるということなのか、何かそういう思いがあれば教えてください。

○田中委員長 なかなか御理解いただけないかもしれないけれども、私自身、この5年間でいついつまでに何かをしなければいけないという思いを持ったことは1回もないのです。要するに、状況が煮詰まってきたところで判断をしていくと。別にむやみにただだらだらとやるということではなくて、やはり一つの結論を出すのには、我々が行っている使命を果たすためには、それ相応の相当の時間なり、労力なりがかかるということですから、そのことが煮詰まると結論には至らないということで、従来、先行したPWRの原子力発電所についても、そう簡単に結論に、再稼働をしている原子力発電所もありますけれども、そう簡単にはいっていないと。

東京電力については、BWR自体が非常に全体として難しい審査の中で、結局、煮詰まってくるまでに時間がかかったという面もあると思います。プラス、最初が東京電力になってしまったと。これも別にこちらが選んだわけではなくて、事業者サイドが結果的にそういうふうになってしまったということですから、それはそれとして、一つの流れでここまで来たということですね。安堵感もないし、何もないですね、私には。

○記者 時事通信のカンダです。

この5年間の中で、一番決断に悩まれたというか、頭を悩まされたようなことが何かありましたら、教えてください。

○田中委員長 とりたてて何かというようなことはないですけれどもね。いろいろな意味で、ひとつひとつが非常に難しい判断がありましたけれども、これはみんな議論しながら判断してきたということであって、私が特に1人で悩んで何かしたというようなこ

とはないと思います。

○司会 ヨシノさん。

○記者 テレビ朝日、ヨシノです。

5年間お疲れさまでした。ありがとうございました。

1つだけ大きくばくっと聞かせていただきたいのですけれども、私は個人的には、委員長の最大の功績の一つは、もんじゅが廃炉になっていったことだと個人的には思っているのですけれども、核燃料サイクルというのが、結局、どうもうまくいかない。プルサーマルの方も余りうまくいっていない。そもそも費用対コストも合わないという状況の中で、今後、どうなっていくか、また、どうあるべきだと委員長はお考えでしょうか。

○田中委員長 個人的にはいろいろな考えがありますがけれども、今ここで個人的考えを述べるわけにはいきませんし、ただ、先週ですか、衆議院の原子力特別委員会に呼ばれて、思いのたけを話さないと三原委員長に言われて話をして、2つ申し上げたのです。規制委員会委員長としてののりを越えるかもしれないけれども、申し上げたいことがありますと言って。

1つは、やはり原子力行政、原子力の在り方について、もっと国会で十分に議論していただきたいと。今のままで、規制委員会だけで原子力を全て動かしているみたいに社会から思われているけれども、そうではなくて、根本にあるのは、今、ヨシノさんがおっしゃったように、やはり原子力の政策がきちんと、どちらを向いてどう行くのかということが明確でないということが大きな課題ですから、まず国会で十分に議論してくださいと。国会でやっていることは原発の賛成、反対ばかりなのだけれども、そうではなくて、もう一つ深めた議論をやっていただきたいということですね。

それから、もう一つは、原子力がどういう道をたどるにしても、今、やはり人材と基盤が非常に心配される状況です。私の後、更田さんということになりましたけれども、どちらも日本原子力研究所のOBみたいなものですね。では、更田君の後、誰かいるかという、なかなか頭に思い浮かばないような状況です、規制委員長ですら。

一般のもっともっと幅広い人材がたくさんいるわけですけれども、そういったところは非常に希薄で、大学だけではなくて、私はいつも申し上げてきたのですけれども、原子力がいろいろな意味で危機的状況のときに、我が国の唯一の原子力の研究開発機関が全然役に立たないで足ばかり引っ張っていると。一体何事だということで、私の半分、出身母体なので、余計頭にくるところがあるのですけれども、そういうふうなことです。その2点を申し上げてきました。

だから、今のお答えには直接は答えになっていないかもしれないけれども、しんしゃくしていただければと思います。

○司会 ヒガシヤマさん。

○記者 朝日新聞のヒガシヤマでございます。

今日も東電の社長に、保安規定に明記することを東電の小早川社長も承諾されたということだと思います。これで東電にボールが投げられたという形だと思いますけれども、これから柏崎刈羽原発は、保安規定の審査を通じて再稼働を目指していくということになると思うのですが、東電に対して注文、こうしてほしいということを教えてください。

○田中委員長 申し上げることは大体申し上げてありますので、これからのことですから、私がいろいろ言うことはないので、約束したことはきちんと守っていくと。それは規制委員会に対する約束だけではなくて、国民に対する約束だと言っているわけですから、そういう意識でやっていただきたいということですね、あえて申し上げれば。

○司会 ほかに御質問のある方。ナガノさん、どうぞ。

○記者 新潟日報のナガノです。

委員長の5年間は、ある意味、東京電力と向き合ってきた、今日も議題になっていましたけれども、5年だったと思いますけれども、この5年間で東京電力の体質という点で、変わった点、変わらない点というのがあれば教えていただきたいのと、もう一点は、東京電力については、立地地域新潟で2002年のトラブル隠しから始まり、メルトダウンの隠蔽問題ですとか、いまだにやはり不信感が根強いというのが知事以下の認識なのですけれども、こういう状況で、事業者の責任とおっしゃるかもしれませんが、こういう地元との信頼が作れていない状況の中で退任されるに当たって、何か気持ちがあれば。

○田中委員長 今の御質問は、いろいろな地元の方の思いをお話しされていると思いますので、私は、それについては、余り細かく何か申し上げるようなことはしない方がいいと思いますので、もうここまで来たのですから、地元は地元で判断していただければいいと思います。

○司会 御質問のある方。一旦、質問された方は手を挙げていただいてよろしいですか。大体分かりました。

では、シズメさん、どうぞ。

○記者 毎日新聞のオカダです。

○司会 失礼しました。

○記者 5年間お疲れさまでした。

ちょっと概略的な話になってしまうのですが、委員長は、当初、独立性と透明性を掲げて、厳格に審査というか、厳格な原子力規制をやっていくという決意でやられてきたわけですが、実際、当初掲げていた理念から、なかなかその理念をそのまま実現するのは難しいと思った局面というのはなかったでしょうか。

例えば、40年ルールについては、当初、相当困難だというふうに繰り返しおっしゃっ

ていたかと思うのですけれども、実際に進んでいくにつれて、合格して認可するところが多かったと思うのですけれども、そういった理念からそれを実行するのがなかなか難しかったという点があれば教えてください。

- 田中委員長 規制委員会、規制庁の組織理念というのは、私は誇るべきものだと思いますし、それで、理念の上で困難だということは全くありません。

40年ルールは、やはり私の想像どおり非常に難しく、元々規制委員会が判断する以前に、事業者が申請してきていないという炉の方がずっと多いわけです。どうしても40年以上の延長をしてやりたいという炉は、3基、今まで出てきていると思いますけれども、廃炉がもう6基です。まだまだ申請もしていなくてどうするかという事業者が、やはり難しいこと、新しい規制基準に対応していくことが難しいという判断があるというふうに耳にはしていますけれども、そういう意味では、決してそんなに私たちの理念がおかしいとか、何か困難をもたらしたとかということはありませんですね。

- 司会 では、手前の方、どうぞ。

- 記者 規制委員会の在り方。

- 司会 お名前をお願いします。

- 記者 済みません。ビーメディアのクラサワといいます。

規制委員会の在り方そのものについて、5年間の経験を生かしてといいますか、通して一つ御質問したいのですが、原子力規制委員会の設置法を見ると、正直言って、私なんかはもっともっと規制委員会というのはできるのではないかなど、国民の生命・健康・財産を守るという元々の理念からすると。

そういう意味でいうと、もっと具体的な、例えば、デブリだとか汚染水なんかの問題にしても、もっと事業者と対話して、指導して、そして、規制委員会の在り方として、ガイドラインを作って、それに適合するかどうかということ判断するだけではない、もっと進んだやり方というのができるのではないかなというふうに私はかねがね思っているのですけれども、別にアメリカのNRCが全てすばらしいとは思いませんが、もっと前に出てできることはあるのではないかと思っているのですが、委員長はどうお考えでしょうか。あるいはこれから先の規制委員会の在り方について、お考えのことがあったら聞かせてください。

- 田中委員長 その線引きが難しいですね。規制の立場と推進の立場とよく言われますけれども、そこをどの辺に線を引いて、どこまで関与していくかという。

明快なのは、要するに、原子力発電所とか何かですけれども、1Fについては、これは国民的な課題だから、規制委員会も相当規制という枠を越えて協力するということが最初から言っているのですが、結局、それを求められないのに、わざわざあだこうだと言うことはできませんので、そこはだんだん向こうも自立性を発揮したのでしょうかけれども、経産省、エネ庁と東電がいろいろなことをやっているという状況の中で、私ども

としてできることは、まず安全の問題をきちんと担保していくという努力になっていると。

多分、そういう点が少し物足りないということがあるのかもしれないですけども、それはいろいろな形で、私もここでも何回か申し上げていますが、皆さんがいろいろな、凍土壁の問題とか、デブリにロボットを入れてとか言うたびにいろいろ御質問を受けていますが、余り私がポジティブな評価をしていないというのは、そういう意味で、技術的に見て本当にそういうものかというのがあります、正直言って。

でも、これをこうしろ、ああしろという、子供ではありませんので、向こうも責任があってやっているわけだし、我々が廃止措置について全責任を負うというの、これもちょっとおかしいので、やはりきちんと規制するというスタンスを貫いた上で、いろいろサジェスションがあってもという、そんなことで、歯切れが悪いかもしれないけれども、今は多分そんな状況でいくのだと思いますけれどもね。

○司会 それでは、マツヌマさん。

○記者 赤旗のマツヌマです。

先ほど委員長も言及されていましたが、アドバイザーボードでの発言について、ちょっと伺いたいと思っております、原子力政策についての議論に不足があるということで、国会の場で十分な議論を進める必要があるという御発言をされていたと思うのですが、これについて先ほどもちょっと発言されていましたが、どういう思いなのかということをもう少し説明していただきたいということ、この議論の範囲が、いろいろな論点があると思うのですが、根本にあるのは原発の運転の是非など、そういったことも含んでいる、そういう議論を意味しているのかということですね。

それから、また、原子力政策の議論の不足によって、これまで5年間を振り返って、原子力規制を行う上で問題点ですとか、困難を感じられたことがもしあったら、教えていただきたいと。

以上です。

○田中委員長 国会の場でそれぞれの考えをぶつけ合って、きちんと議論するという中で、原子炉を利用していくのか、原子力発電所をもっと使うのか、やめるのかという議論も含めて出てくるので、前提としての議論がないままに、今、若干、1F事故が起こったことだけで判断しているように私は思うのです。そのところはやはりきちんと議論すべきイシューだと私は思っています。そういうことができるようにならないと、我が国はもう少し成熟した社会にならないと思います、何でも。そういう思いで申し上げます。それをやるのは国会でしょうということですね。

それから、規制上の問題は、私は、それはゼロとは言わないけれども、特に大きな障害があったということではなくて、今の私たちの規制のやり方についても、在り方についても、だんだん理解が深まってきているのだらうと思っておりますけれども。

マツヌマさんは、発足以来240回皆勤賞かもしれないですね、珍しく。

○司会 御質問のある方。では、東洋のオカダさん。

○記者 東洋経済のオカダです。

今、福島原発事故をめぐりまして全国でたくさんの裁判が行われていて、いまだに事故が起こるかどうかの予見可能性というものが問われているわけです。規制委員会ができて、二度とこういったことを繰り返さないということで、大変厳しい規制を敷き、取組を進めてこられたかと思うのですが、改めて、あの事故というのは本当に予見できなかったものなのか、どのようにお考えでしょうか。

○田中委員長 今の御質問は、予見できていたら事故は起きないと思います。でも、予見できなかったかどうかということについては、今、裁判で争われている問題ですから、私が何か申し上げるべきことではないと思います。

○司会 御質問がある方。アベさん。

○記者 日経新聞のアベです。

5年間お疲れさまでした。1点だけ最後にお伺いしたいのですが、事故から6年半たったことになりましたが、いまだに原子力への不信感というのは拭き切れていない状況だと思います。いろいろ理由はあると思うのですが、いまだに不信感が続いているというのは何が一番の理由だとお考えになりますでしょうか。

○田中委員長 やはり1F事故という重大な事故を経験した国民は、そんな簡単に拭き去れるものではないし、多分、1世代かかっても拭き去れないかもしれないという気はしますね。スリーマイルの事故が起きてからだって随分たっていますけれども、どこで拭き去れたかどうかという判断すら難しいですけれども、20年、30年ぐらいたって、ようやく新しい炉が造れるようになったという状況を見てみると、私はそう簡単に拭き去れないと思います。その中でどうしていくかということは、よくよくみんなで議論していただく必要がある。規制委員会だけにそのことを期待されても、それはちょっと違いますという先ほどの議論になるわけですね。

○司会 ヤマグチさん。

○記者 プラッツのヤマグチです。

5年間ありがとうございました。柏崎刈羽の件なのですが、技術審査は事実上終了しているところで、柏崎刈羽、特にBWR、他の原発にとって一つのお手本になるということはおかねてから言われてきた。この終わりをもってして規制庁側のマンパワーのシフトですとか、もしくは事業者がそれに対応する能力ですとかいう部分は、柏崎刈羽が終わるということで、多少なりとも迅速化といいますか、効率的な側面は期待できそうですか。それとも、かねてからおっしゃっていたように、特に地盤のところはそれぞれ

のプラントで問題になるということで、なかなかそうもいきにくい側面があるのか、最後をお願いします。

○田中委員長 BWRの審査はそれぞれに少しずつは進んでいると思いますけれども、なかなか先が見えないというのも実態だと思います。Pの方は、申請してきたところはかなり終わっているし、今は泊が残っているぐらいですから、もちろん特重の審査とか、いろいろありますけれども、相当シフトはしていますね、審査の体制は。ただ、進むかどうかということは、事業者の対応もあるし、いろいろな議論がありますので、そう簡単に進むだろうという予測は軽々にはできないと思っています。

○司会 御質問がある方。では、キノさん。

○記者 フリーランスのキノと申します。

1Fについてなのですが、委員長は、『FACTA』のインタビューの中で、デブリを取り出すのは不可能ではないかというお話をされていると思うのですが、そうすると、福島第一は最終的にどういう姿を目指していくのがいいのか。これは今後も福島のことにかかわっていくというお話をされている委員長としては、もし、その辺、何か思いがあればお伺いできないかと思います。

もう一点、現在の作業は、本来は廃炉作業というのであれば、廃止措置計画を出してから進めるのが筋ではないかと思うのですが、そこで最後の姿が担保されていないために信頼回復が遅れているのかなと思えるのですが、その辺、例えば、規制委から廃止措置計画を早目に出すようにという働きかけのようなことは難しいものなのか、お伺いできませんでしょうか。

○田中委員長 結論から言うと、ファイナルな姿を出して廃炉計画を作るというのは、多分、まだ不可能だと思います。私はデブリを取り出すことはできないとは言っていないのです。非常に難しいだろうと、簡単ではないですよということです。皆さん、報道ベースでいろいろなことを、東電とか、おっしゃっていますけれども、そう簡単なことではないだろうと思っています。だからこそ、じっくりとステディにやっていくしかない。だから、私どもも、先ほどクラサワさんからの御質問もありましたけれども、数年前から、5年程度の事業はある程度見えるだろうと。半年に1回ずつ、基本的には改正しながら、進捗を見ながら、リスクを下げながら、少しずつ廃炉に向かうという計画を、私どもとしては提案しています。ある程度それを見ながらやっているのだと思いますけれども、今、そういう状況だと思いますね。本来は、一步一步の、廃炉、汚染水だけではなくて、評価検討会の状況も、それから、廃棄物のところも非常に重要だから、規制の方の知委員主体になってやっていただいていますけれども、実態に合ったような形で少しずつ計画を見ながら、事故が起きないようにやっていく、それしかないのだと思います。今、余り楽天的になるのは、ちょっとリスクが大きいと思います。

○司会 では、キノさんの後ろの方。

○記者 北海道新聞のホソカワと申します。

先ほど委員長は、Pの中で残されているのは泊原発だという話がありましたけれども、先週もこの件について、非常に時間がかかっている原因は何でしょうかとお尋ねしたところ、委員長は事業者の問題が大きいとおっしゃったと思うのですが、具体的に事業者の問題というのはどういうことを指しているのかをお伺いしたいのです。例えば、審査を通して、専門家が指摘しているような断層の存在を事業者が認めなかったりという場面があったのですけれども、これは、例えば、事業者の安全に対する姿勢が足りないとか、もしくはそもそも原発を再稼働するだけの技術力を本当に持っているのだろうかということも含めて問題と見ていらっしゃるのか。なぜこれだけ長引いているのかの関連をお伺いしたいのです。

○田中委員長 私の知る限りにおいては、泊原発の敷地の問題について、一旦はオーケーかなと思ったのだけれども、石渡委員が現地調査をしたら、ここは地形的に見ても、もう少しきちっと調べる必要があるというところで、それに対しての対応が少しずつ進んでいると思いますけれども、やはりどうしても時間がかかる要素はそこにあるのだと思います。プラント自身は相当進んでいるので、そんなに大きな問題があるとは聞いていませんし、私も認識していません。

○司会 では、ドイさん。

○記者 電気新聞のドイです。

委員長、5年間お疲れさまでした。3年ほど前から事業者のトップとの対話活動が始まったわけですが、今年度から3巡目に入りました。対話を始めてから現在にかけて、事業者の考え方、姿勢などに変化を感じたことがありましたら教えていただければと思います。

○田中委員長 電気新聞の方だということから感じていると思いますけれども、最初の1巡目は、双方、かなり羽織、袴を着たような感じで、そもそも皆さんの前で電気事業者のトップがあけすけにいろいろなことを問いかけられたり、発表したりするということは、まず今まで経験がない。でも、3巡目ぐらいになってきたら、ほとんどそれは当たり前のようになっていると思うのです。そのことが私は大事だと思うのですね。みんなの前で自分たちの思いをきちっと述べるような習慣ができることが、電気事業者に対する社会の信頼を得るという意味で、私は非常に重要だと思います。中身の点でもそれなりに進歩はあると思いますけれども、ああやってみんなの前で安全文化に対する取組とか、いろいろ話をすれば、同じことを次の年も、その次の年も言えないわけで、どういう進捗があったとかいうことで、そういう意味で、だんだんそういうことを考えていただいて、取り組む姿勢ができてくるのだと思っていますので、お互いにしんどいところはありますけれども、できるだけ続けてやっていった方がいいのではないかという気が

します。

○司会 御質問のある方。シゲタさん。

○記者 NHKのシゲタです。

5年間お疲れさまでした。1点お伺いしたいのですけれども、事故から6年半がたつ中、6原発が合格し、そのうち3原発5基が動いてきている状況において、これまでいろいろな規制審査をたどってこられたと思うのですけれども、田中委員長がいなくなった後の新しいメンバーに求めることは一体何なのか、そして、事故から6年たちましたけれども、全国の電力事業者に求めることは何なのか、お伺いしてもよろしいでしょうか。

○田中委員長 まず、更田さんは5年間、最初から一緒にやってきていますから、今までの5年間の状況はつぶさにわかっているし、その中でも特にプラント関係とか、1Fについては、技術的な面においては非常にリーダーシップを発揮されてきているから、そのことが結局、今の規制庁とか規制委員会の姿を作ってきていますから、多分、それはそういう方向で踏襲されるのだらうと思います。大事なことは、独立性をきちっと堅持しながら、今までの透明性とかも堅持しながらやっていくということかと思えます。

電気事業者については、いつも申し上げていますが、とにかくどんなトラブルでも一切起こさないぐらいの気構えでやっていただきたい。トラブルは、そう思っても起こるかもしれないけれども、そういう気構えで、緊張感を持ってやってもらうことが大事ですよということです。幸い、川内にしろ、玄海にしろ、今まで動いている炉は、トラブルでとまるような事態は全く起きていないというのは非常に幸いだと思っています。

○司会 カミデさん。

○記者 フリーランス記者のカミデです。

5年間お疲れさまでした。いつも言っているようなことを最後にまたお聞きするのですが、既に委員長も言っておられましたが、1Fの事故があって、国民の多く、今でも世論調査をすると、原発に対して批判的、あるいは消極的な声が多い。そういう中で、原発規制をやってこられて、実際には、少なからぬ意見として、政府の今の原発方針と一体となってやっていくのではないかという声はどうしても出てくる。これも何回か質問に出ているのですけれども、その中で、何らかの政治的圧力をお感じになったことがあるというニュアンスと、あってもそれには影響されないというニュアンス、いろいろな形でこれまでお答えございましたが、国民に対して、原子力規制委員会、さっき言った独立性、透明性ということについて、もう一度、具体的なそういう問題という指摘がある中で、それに対するような回答をよろしくお願いします。

○田中委員長 国民というのは非常にディフィニッションが広くてあれですけれども、い

ろいろなお考えがあります。ただ、私どもが判断したことについては、私どもとして、政治的圧力とか、そんなことは全く関係なしに、科学的、中立的に判断をして、我々ができる、一つの理念に基づいてきちっとやってきているということでは、一点の曇りもないというのは言い方があれですけども、そこは堂々と誇れると思っています。その結果をどう判断されるかは、国民それぞれのいろいろな判断があると思いますから、そこを今、私があればこれ言うつもりもないし、いろいろなお考えがあつていいのですよ、民主主義の世の中ですから。

○司会 では、真ん中の列の方。

○記者 福島民報社のハンザワと申します。

第一原発の廃炉作業に関しまして、就任から5年たちまして、現状、どのように捉えられているのか。特に進んでいる点、評価できる点、評価できない点、あれば教えてください。

あと、退任後、飯館村にお住まいになられるという話もありますが、今後福島県とどのようにかかわるのか教えてください。

○田中委員長 1Fの状況は、事故当初は本当に目も当てられないという感じでしたね。まず、労働環境の改善から、ここで何度も話をしましたけれども、何人か、毎年のように死亡事故も起きるような状況があったし、いわゆるトラブルもいっぱいありましたけれども、私はやはり働いている人が亡くなるような事故は絶対避けなければダメだという意識があつて、当時、廣瀬社長にも二度ほど、とにかく労働環境を改善しなさいということをお願いして、そういう意味では、今、随分落ち着いて仕事ができるようになってきていると思います。そういった人的な事故も減ってきていると思います。ゼロかどうかは詳細にわかりませんが、少なくとも死亡事故はなくなっていますね。

それから、地元の方はいろいろな不安はお持ちかもしれませんが、今、帰還が解除されて、戻って、1Fの状況が心配だという状況ではないですよということは私も何年前に回ってお話をさせていただいています。それは年々、だんだんよくなってきていると思います。だから、少しずつ安定的にはなっているということだと思います。

それから、飯館村に行つてからの話は、個人的にいろいろな思いがあつて行きますので、まあ、見ていてください。

○司会 その隣の方。

○記者 朝日新聞のオオニタです。

2点お伺いします。1点は、少し具体的なことで、事業者の適格性ということでお伺いします。東京電力に対しては適格性ありということで結論を出されたわけですが、一方でもんじゅに関して、原子力機構に対して、事業者としての資格を疑うとおっしゃつておられて、その結果として廃炉を政府が決めたということになります。東電と原子力

機構の適格性の判断の分かれ目というのは、非常に難しいと思うのですが、どんなふうに委員会の中では整理されているのでしょうか。それが1点目。

2点目は、委員長、まさに福島の御出身でいらっしゃる、先日の記者会見でも述べましたけれども、そのことは非常に意味があったと私は思っています。この5年間、多分、委員の中では最も福島には行かれたのではないかと思います、何回ぐらい福島に入られたのでしょうか。その2点、お伺いします。

- 田中委員長 適格性について、東京電力と今の原子力機構、もんじゅのところと比較するというのは、質の違う適格性だと思うのです。要するに、簡単に言えば、もんじゅのときに勧告を出したのは、自分たちが決めた保安規定が守れないと。それが繰り返して、何ぼでも、まさに泉のごとく、どんどん違反が出てくるという状況にあったということです。ですから、東京電力だって、今日もお話ししたけれども、保安規定にそういうことをきちっと書いていただいて、もしそういう状況になったら、もっと厳しい判断があるかもしれない。ただ、今回の東京電力についての事業者としての適格性の判断の中では、もちろん事故を起こした事業者だからこそ、そういう意味できちっと見たわけですが、あの事故を冷静に見てみると、それから、その後の東京電力の対応とか、今回、いろいろなプロセスの中で確認したところでいくと、頭から適格性がないと否定するだけの状況にはないというところの消極的な適格性を認めたという、そういうものかなという気がします。

それから、福島に行ったというのは、そんなに多くはないのですよ。私自身が余り外に出ることはできなくて。1Fに行ったのが3～4回ですかね。それから、各市町村を3回に分けてずっと回って首長さんといろいろお話をさせていただいたぐらいですね。あとは、プライベートみたいなチャンネルで2～3度呼ばれて話しに行ったことはありますけれども、それくらいです。

- 司会 御質問ある方、いらっしゃいますか。最後、お2方でよろしいですか。では、前の方、簡潔にお願いします。
- 記者 フリーのヨコタハジメですが、泉田前新潟県知事が原子力規制委員会と安倍政権の責任のなすり合いで国民の生命が脅かされている、原子力防災には穴があると言って、今回、自民党から出ることになったのですが、具体的には、北朝鮮のミサイル・テロ攻撃のリスクを所管外と言っていること、国民保護法で対応するという一方で、我関せずという姿勢をとっていることと。もし、今、柏崎刈羽原発が北朝鮮の攻撃を受けてメルトダウンを起こしたときに、44万人の周辺住民を避難させるバス1万3,000台、運転手1万3,000人を確保しないといけないのですけれども、それが1,000人しかいないと。自衛隊の出動も拒否された。こういう状態を放置したまま5年間終わらせることに対してどうお考えになっているのか。このまま原子力規制委員会の所管外だと言い張っておやめになるのか、安倍政権に対して、これはきちんとやるべきだということと言

っておやめになるのか、泉田知事の告発に対する受けとめと対応を。

○田中委員長 それはあなたがいつもここに来て演説されるだけであって、聞き置くだけにしておきます。いろいろなお考えをお持ちの人がいるし、いろいろな評価をする人もいるでしょうけれども、それを一々ここで議論するような話ではありません。

○記者 泉田さんが出馬する動機になっていますよ。

○司会 次にいきます。ミヤジマさん。

○記者 『FACTA』のミヤジマです。

5年間を振り返り、本当に御苦労さまでした。地震の先生が最初になくなり、女性の委員になくなり、福島出身の委員長になくなって、一体この組織はどこまで風化していくのだろうと、率直にそう思っている人が私はいると思ひまして、ただ唯一の救いは、委員長が飯館村に住むのだ、飯館村でふるさとのお手伝いをするのだと、私はこれは最大のメッセージだと思っているのですが、これは先生が原子力推進側におられた贖罪の気持ちからなのか、それともふるさとを思う気持ちからなのか、それとも男気というのですかね、それは何なのかと。あえて伺いたいことは、風化の責任は実はメディアの側にも重いものがあるって、これから飯館村に行かれるのだったら、中央のメディアに対して、どういう報道というのですかね、福島というか、風化していくものに向き合ってほしいという、メディアに対しての率直な注文を私は伺いたいと思うのです。その2点です。

○田中委員長 5年間お付き合いいただいて、いろいろな形で御質問受けながらということで、ミヤジマさんにはまた別の意味で叱咤激励されてきたように思います。ありがとうございました。

私自身がここに来ることを決心したのも、やはり時間とともに福島は風化していくだろうと。その中の歯どめにでも少しはなるのではないかということで、こちらに来ていたということがあります。その分、向こうで直接的にいろいろすべきことも、随分義理を欠いてきたということもあって、ここで得られた、皆さんもそうですし、いろいろな形で、いろいろなチャンネルというか、いろいろな知り合いができましたので、それをまた福島の復興に少しでもお役に立てたらいいなと思って戻ります。

今、いくつかの、どういう動機だということですがけれども、基本的にはいろいろなまぜになっているところはあると思います。いろいろなものが一緒になっているので、一言では言えませんが、是非、皆さんにも、機会がありましたら取材に来ていただいて、いい報道をしていただくようお願いしたいと思います。風化させてはいけないというのは頭でわかっているけど、時間というのは、だんだん人間の記憶を風化させるものですので、そこをどれくらい歯どめになるかどうか、ちょっと私はわかりませんが、一個人ですから。でも、やってみます。

○大熊総務課長 事務局から補足をさせていただきます。先ほど福島に何回行かれたのでしょうかという質問がございました。事務局で確認いたしましたところ、在任中に出張として委員長が福島に入った件が7件ございましたので、お知らせを申し上げます。

○田中委員長 7回も行っていた。

○大熊総務課長 出張、現地確認、面談等々。

○田中委員長 ああ、そっちも入れてね。全部入れるとそれぐらいですね。

○司会 それでは、会見は以上としたいと思います。どうもお疲れさまでした。

○田中委員長 どうもありがとうございました。

—了—